

推薦レポート

山口俊雄先生推薦

太宰治『桜桃』——「子供より親が大事」再考

中山 明子

一 はじめに

「新潮」一九四八年五月に掲載された『桜桃』に登場する「子供より親が大事」は非常に有名な一節であり、本箇所注目した論文は数多く発表されている。例としては佐藤氏の

これは、「桜桃」を貫くテーマである。「子供より親が大事」ということが主人公太宰という小説家の呪言となって主人公を苦しめるのであるが、それはいい変えれば、「子供より親が大事」であるはずがない、という市井人の道徳に挑み闘う一人の芸術家の市井、芸術家の道徳を描いたものでもある。^①

という論や、勝原氏の

冒頭の二文が語っているのは、世間の常識倫理に対する抵抗などではない。〈私〉自身が、〈子供より親が大事〉と〈子供のために〉の間で揺れていること、そしてその針はおうおうにして〈子供のため〉

の側に触れてしまうということである。^②

が挙げられ、様々な立場から「子供より親が大事」について検討されていることが分かるだろう。しかし「子供より親が大事」は「子供より親が大事」と思いたい。」という一文の前半部に過ぎず、一部分のみを切り取って論を展開するというのは些か乱暴ではないだろうか。本稿では、「子供より親が大事」に続く「、と思いたい。」に焦点を当て、このような表現が付け加えられた意味や、作品内におけるアフォリズムの意義・効果について明らかにしていきたい。尚、本文は全て青空文庫より引用する。

二 構成からみるアフォリズム

先述の通り、「子供より親が大事」に注目した論文は数多く発表されているが、このような〈切り出し〉は一般読者によっても行われ、本箇所はアフォリズムとしても流布している。^③ここでは「子供より親が大事」の切り出しやすさについて、構成の面から考えていきたい。

「子供より親が大事」が読者の印象に残り、切り出される要因は三つ

考えられる。一つ目は、この言葉が本文の冒頭と末尾に置かれているためだ。『桜桃』は「われ、山にむかいて、目を挙ぐ。」というエピソードが置かれた後、「子供より親が大事、と思いたい。」という一文から本文が始まる。そして末尾は「しかし、父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまずそうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、そうして心の中で虚勢みたいに呟く言葉は」という長い文章の後に読点を置いて、「子供よりも親が大事。」という言葉で終わるのだ。作品内で「子供より（も）親が大事」という言葉は三回登場するのだが、そのうちの二つが冒頭と末尾に配置されていることは、読者への印象付けに寄与していると考えられるだろう。

二つ目は、「子供より（も）親が大事」という言葉の前後で文章の流れが一度止められているためである。これは冒頭を除いた二つの「子供より（も）親が大事」に当てはまる。例えば、二回目の「子供より親が大事」では

「いらっしやい」

「飲む。きょうはまた、ばかに綺麗な縞を、……」

「わるくないでしょう？ あなたの好く縞だと思っていたの」

「きょうは、夫婦喧嘩でね、陰にこもってやりきれねんだ。飲む。今夜は泊るぜ。だんぜん泊る。」

という語り手と「酒を飲む場所」の女との会話の後に、

子供より親が大事、と思いたい。子供よりも、その親のほうが弱いのだ。

という語り手の〈思い〉が語られ、その後に「桜桃がでた。」という客観的な〈事実〉が記されている。「子供より」以下の心内文が〈客観的事実〉に挟まれていることで文章の流れが一度止められ、「子供より親が大事」という一節が前後の文章から独立しているのである。そして、末尾についても

しかし、父は、大皿に盛られた桜桃を、極めてまずそうに食べては種を吐き、食べては種を吐き、食べては種を吐き、そうして心の中で虚勢みたいに呟く言葉は、子供よりも親が大事。

と、「食べては種を吐き」という言葉を三回続け、「そうして心の中で虚勢みたいに呟く言葉は、」と一呼吸おいた後に「子供よりも親が大事。」と記されている。このように、「子供より（も）親が大事」は一種の〈構成上の独立性〉を持つており、これこそが読者への印象づけに貢献しているのではないだろうか。

また、アフォリズムには心内文や語り手の独白文が多いことを踏まえると、そのような言葉の前に置かれる〈会話文〉には心内文としての言葉（「アフォリズム」）を際立たせる役割があると考えられる。〈会話文〉から〈心内文〉へという流れは、読者を他者との双方向的やりとりが行われる世界から、急激に語り手の心の中へと引き込むだろう。そして短い〈心内文〉の直後に〈客観的事実〉を記すことで、読者を語り手の心の外へと、一気に引き戻すのだ。このような一種の急激な〈場面転換〉もまた、本場面におけるアフォリズムの〈切り出し〉に貢献していると考えられる。

三つ目は、読点が効果的に用いられているためである。『桜桃』全三回の「子供より（も）親が大事」のうち、末尾を除いた二回は後ろに「と思いたい。」を伴っているが、そのどちらにも「子供より親が大事」と「思いたい」の間に「、」（＝読点）が打たれている。感覚的な問題かもしれないが、一般的に「子供より親が大事と思いたい」ことを記したい場合は読点を打たない、もしくは「子供より、親が大事と思いたい。」や「子供より親が大事と、思いたい。」と記す場合が多いのではないだろうか。しかし、本作品では読点が「子供より親が大事」と「と思いたい。」の間に打たれており、「子供より親が大事」部分のみが切り出されやすい構造がとられているのである。これは偶然とは考え難く、作者によって意図的に施された〈工夫〉の一つであると捉えるべきではないだろうか。

このように、『桜桃』の「子供より親が大事」が切り出され、アフォリズムとして流布する背景には、作者による〈構成上の工夫〉があると考えられる。これはつまり、読者による「子供より親が大事」部分の〈切り出し〉や流布は、作者の狙い通りであったということだ。もちろん、世間に流通しているアフォリズムの中には、読者が作品の中から好きなフレーズのみを〈切り出し〉て、流布させたものもあるかもしれない。しかし、少なくとも『桜桃』においては、「読者にこの部分を切り取らせよう」という作者の意図が反映した結果としての〈切り出し〉だったのではないだろうか。

また、本章段の最後に、「子供より親が大事」という言葉自体が持つインパクトについて触れておきたい。佐藤氏が『桜桃』を「子供より親が大事」であるはずがない、という市井人の道徳に挑み闘う一人の芸術家の市井、芸術家の道徳を描いたもの⁵⁾だと述べたように、「子供より親が大事」は、世間の常識からの〈乖離性〉を意識したのではないか

と思わせるほど、読者に強い印象を与える言葉である。語り手はこの言葉の後に子供や家庭に対する〈思い〉を述べるものの、「子供より親が大事」が世間の認識から大きく乖離した主張であるが故に、読者が感じる一瞬の戸惑いやインパクトは否定できない。詳細は次章で述べるが、語り手は「子供より親が大事」という考えに対して明確な立場は明らかにしていない。しかし、本文に繰り返し記述され、〈抜き出し〉やすい言葉として選択された言葉が「子供より親が大事」であったことは重視すべきではないだろうか。語り手の立場が曖昧とはいえず、「親より子供が大事」と「子供より親が大事」とでは、読者に与えるインパクトの大きさという点で大きな差がある。作者はこの〈差〉を自覚・認識した上で「子供より親が大事」を選択し、その下に「と思いたい。」を付け加えるという方法を取ったのではないだろうか。「子供より親が大事」の〈切り出し〉には言葉自体のインパクトも影響しており、アフォリズムの成立・流布と作者の意図は深く結びついていると考えられる。

三 明言しないアフォリズム

ここでは、「子供より親が大事」に続く「と思いたい。」に焦点を当て、このような表現が付け加えられた意味や、作品への影響について明らかにしていきたい。

先述の通り『桜桃』には「子供より（も）親が大事」が三回登場するが、これらは「と思いたい。」や「虚勢」という言葉によって曖昧さが付与され、明言されていない点で共通している。しかし、これは語り手が何事においても言い切ることのできない、優柔不断な男であるためではない。むしろ、語り手は自身が〈思う〉ことに対しては明言することが多い人物であった。例えば、冒頭の

子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えてみても、何、子供よりも、その親の方が弱いのだ。少くとも、私の家庭においては、そうである。まさか、自分が老人になってから、子供に助けられ、世話になろうなどという図々しい虫のよい下心は、まったく持ち合わせてはいない

や、妻から「涙の谷」と言われた際の

お前はおれに、いくぶんあてつける気持で、そう言ったのだろうが、しかし、泣いているのはお前だけではない。おれだって、お前に負けず、子供の事は考えている。自分の家庭は大事だと思っている。子供が夜中に、へんな咳一つしても、きつと眼がさめて、たまらない気持になる。もう少し、ましな家に引越して、お前や子供たちをよろこばせてあげたくてならぬが、(以下略)

のように、語り手が〈思う〉ことや〈思った〉ことに対しては、はっきりと意思を示しているのである。それにも関わらず、「子供より(も)親が大事」に対しては「と思いたい。」や「虚勢」という言葉を用いて自身の考えや立場を明確にしないのはなぜだろうか。

稿者は、「子供より親が大事」という言葉を明言せず、語り手の立場を明確にしないことには、「父」としての語り手と、「小説家(≠芸術家)」としての語り手の〈乖離性〉を仄めかす効果があると考ええる。『桜桃』には、語り手の子を想う気持ちや小説家としての苦悩、家庭を顧みない行動など、様々な〈思い〉や〈行動〉が描かれている。そして、西原氏が「こ

の作品の主人公には思うということと、行動するということの間に、いささかのギャップがある」と指摘するように、「思うけれども行動しない」語り手から、〈思い〉と〈行動〉の乖離を感じる読者も少なくないだろう。「子供より親が大事、と思いたい。」という一文は、そのような読者の〈違和感〉に対して「父」としての語り手と「小説家」としての語り手が〈乖離〉し、彼にとつて両者が一致し得ないものであることを仄めかしているのではないだろうか。

人間は、一つの立場や要素で成立するものではない。『桜桃』の語り手が「夫」として、「父」として、そして「小説家」としての顔を持っていたように、我々もまた、人々との関係の中で複数の立場や肩書きを持ち、それらを〈統合〉させながら生きている。しかし、『桜桃』を扱った論文を見ると、「父」としての語り手と「小説家(≠芸術家)」としての語り手を別物として、彼の中で〈対〉になるものとして、検討している場合が少なくない。なぜ読者は『桜桃』の語り手の中に相反する自己を見出すのか。それは「子供より親が大事、と思いたい。」という一文、特に、「意思」ではなく「望み」を表す「と思いたい。」という言葉が記されているからではないだろうか。そして、その一文を経て語り手の〈思い〉と〈行動〉の乖離が描かれるために、それぞれに「父」や「小説家(≠芸術家)」という立場を与えて読み解いていくとは考えられないだろうか。「と思いたい」は、『桜桃』語り手の〈乖離性〉を説明する(別の言い方をすると〈正当化〉する)ための言葉であり、語り手の理解、延いては『桜桃』理解の〈道標〉のような役割を担っているのである。

また、「子供より親が大事」という考えに対する語り手の立場が明確にされていないことに着目すると、『桜桃』は単なる〈自己弁護の作品〉ではないと言うことができる。先述の通り、『桜桃』は「子供より親が大事」

を繰り返して記す一方で、「子供より親が大事」という考え方に対する作者や語り手の〈答え〉は明らかにしていない。あくまでも「子供と親のどちらが大事か」という問題の〈提起〉にとどめているのである。このことから、『桜桃』の目的、つまり作者が最も重点を置いたのは語り手の〈弁解〉や〈弁明〉ではなく、作品に普遍的な〈問題〉や〈テーマ〉を付与することであつたとは考えられないだろうか。「子供より親が大事、と思いたい。」は、語り手と妻の「夫婦喧嘩の小説」である『桜桃』を、普遍的な問題やテーマを抱えた作品へと広げ、「自己弁護の作品」として認識・分類されることを回避しているのである。

四 おわりに

以上見てきたように、「子供より親が大事」というアフォリズムは「子供より親が大事、と思いたい。」という一文の前半部を切り出したものであり、それは作者による構成上の工夫であると考えることができる。しかし、前半部を印象付ける一方で、作中では子供への〈思い〉を明かしたり、「と思いたい。」をつけて明言を避けたりと、「子供より親が大事」なのか否か、どちらとも言えない表現がとられていた。このような徹底された〈曖昧さ〉が、作者によって意図的に仕組まれたものである以上、一文の前半部を切り出すのではなく、「と思いたい。」を含めて考えるべきではないか、という提起を試みたのが本稿である。「と思いたい。」部分は、読者による（作者にとつて都合の良い）語り手像の理解に貢献し、〈問題〉や〈テーマ〉を提示することで、作品に広がりを与えている。「子供より親が大事」と、それに続く「と思いたい。」の存在によって現在もさまざまな論が提出されているのであり、語り手の描写・テーマの付与という点において、「子供より親が大事、と思いたい。」は作品の核

であると言えるのではないだろうか。

注

- (1) 佐藤郁子「『桜桃』の父」とくにその「義」について」（森安理文（編）『太宰治の研究』、新笙社、一九六八年）
- (2) 勝原晴希「非在の〈山〉に向かって——太宰治「桜桃」の姿勢——」（『日本近代文学』第四六集、一九九二年五月）
- (3) 山口俊雄（編）『太宰治をおもしろく読む方法』（風媒社、二〇〇六年）
- (4) 山口（編）前掲書
- (5) 佐藤前掲論
- (6) 西原千博「『桜桃』と『哀しき父』——脅かされる父、あるいは父である文学者——」（『札幌国語研究』巻一、一九九六年）